

# 章草名義考

庄村真琴

はじめに

章草は、一般に「漢代の草書」とされており、例えば『日本国語大辞典』には、「漢字の書体の一種。隸書と草書との中間的な性格をもつ書体。この書法にすぎた杜操を後漢の章帝が称揚したところからこの名があるという。」とある。また、『広辞苑』（第五版）には「隸書から草書への過渡的書体。」と説明されている。

このように章草とは、現在通行する草書（今草）の前のもので、篆書・隸書から派生し、とくに隸書を捷書きして、その波磔の残存しているものであると説かれている。

別の角度からの見方として、北川博邦氏は『章草大辞典』（雄山閣・一九九四年）に、松井如流氏が「章草とは法帖用に作られた書体ではなかったか」と言われたというのを読んだ覚えがある。と紹介され、「章草は遡って漢代の草書を、下は降って二王以下の今草を學ぶ為の入門の關鍵なのである」と述べられている。

従来、章草を実際に倣すことのできる伝存資料は乏しかったが、二十世紀に入ってから漢・晋の草書を示す新資料が出土し、注目されるようになった。本稿では、まず新資料出現以前の章草に対する認識の歴史をたどるべく、その名義について考察を試みることにしたい。

## 一 名称について

### 1 章草

後漢・許慎の『説文解字』叙に、

漢興有艸書。

（漢朝が興起すると、草書が生まれた）

と言う。しかし、同叙に引く「新の六体」には草書の名はなく、省略された書として通行が認められた程度のものとも思われる。

なお、後漢・班固の『漢書』芸文志に、

漢興、肅何草律。

とあり、この記事を許慎が誤解して「漢興有艸書」としたともいわれる。草律とは、律（刑法）を草（はじ）めるの意である。

また、後漢・趙壹の『非草書』に、

夫草書之興也、其於近古乎。

（そもそも草書の起こったのは秦末のことであろうか）

とある。このように漢代では一般に「草書」と呼ばれていた。

晋・衛恆は『四體書勢』に、

漢興而有草書、不知作者姓名。至章帝時、齊相杜度號善作篇。後有崔瑗崔寔、

亦皆稱工。杜氏殺字甚安、而書體微瘦。崔氏甚得筆勢、而結字小疏。

（漢が興って草書ができた。これを作った者の名前はわからない。後漢の章

帝の時代に至り、齊国の相の杜度が、よく篇を作ると言われた。後に崔瑗と

崔寔があらわれ、どちらも巧みであると称された。杜氏の殺字（文字の簡略

体）はおおざっぱであり、字体はやや瘦せていた。崔氏は非常に筆勢を得て

おり、結体はすこしまばらである。）

と、章帝時代（七六―八八）の杜度を能書としてあげている。

南朝・宋・羊欣は『古來能書人名』に、

高平都惜、晋司空會稽山内史。善章草、亦能隸。都超晋中書郎、亦善草。

(高平の都惜は晋の司空・會稽内史であった。章草に巧みで、また隸書もよくした。都超は晋の中書郎で、また草書をよくした)

と言ひ、初めて「章草」の名称が登場する。

六朝を経て唐に至ると、孫過庭の「書譜」に、

雖篆隸草章、工用多變、濟成厥美、各有攸宜。篆尚婉而通、隸欲精而密、草貴流而暢、章務檢而便。

(篆・隸・草・章草の体は、造型的技法も変化多様であるが、その美を成しとげるには、それぞれ理にかなった要訣がある。篆書はまろやかにすることを大事にし、隸書は緻密に行きとどかせることを重んじ、草書はのびのびと流動性に富むようにするのが大切であり、章草はひきしまった簡便さに心ずることが肝要である)

というように草書と並んで「章草」を書体名としてあげ、草書との別を明らかにしている。

唐・張懷瓘は「書斷」に、章草を書体の一として項を立て、

案、章草者、漢黃門令史游所作也。衛恆李誕竝云、漢初而有草法、不知其誰。

蕭子良云、章草者、漢齊相杜操始變隸法。非也。王愷云、漢元帝時、史游作

急就章、解散隸體、麤書之。漢俗簡惰、漸以行之。是也。此之存字之梗概、

損隸之規矩、縱任奔逸、赴速急就、因草創之義、謂之草書。惟君長告令臣下、

即可。

(思うに、章草は、漢の黄門令の史游が作ったものである。衛恆と李誕(章誕?)は、「漢の初めから草法があったが、作者が誰であるかわからない」

といい、蕭子良は、「章草は漢の斉国の相の杜操が始めて隸法を変じたものである」といつているが、誤りである。王愷が、「漢の元帝のとき、史游は急就章を作り、隸体を解放して、それを粗略に書いた。漢の風俗は、一般に簡単に手間のかからないことを好んだから、漸くこれが流行することになっ

た」といつているのが正しい。これは文字の梗概をのこして隸書の規矩をけ

ずったもので、自由奔放、敏速に赴き、急いで書けるようになった。「草創」

(下書きを作る)の意味に因んでこれを草書といつた。ただ君主が臣下に命令をくだす時にのみ使うことができた)

と解説している。さらに、

至建初中、杜度善草、見稱於章帝。上貴其迹、詔使草書上事。魏文帝亦令劉異通草書上事。蓋因章奏、後世謂之章草。惟張伯英造其極焉。

(建初年間(七六一八四)になると、杜度が草書を善くし、章帝に称えられた。帝はその書を貴ばれ、詔して上奏文を草書で書かされた。魏の文帝も劉異に草書の上奏文を書かされた。けだし、「章奏」(上奏)に因んで、後世これを章草というようになったのである。ただ張伯英(張芝)のみその極地に達している。)

と章草の名の由来にふれている。また、

懷瓘案：……呼史游草爲章、因張伯英草而謂也。亦猶篆周宣王時作、及有秦

篆、分別而有大小之名。魏晉之時、名流君子、一概呼爲草、惟知音者、乃能

辨焉。章草即隸書之捷、草亦章草之捷也。案杜度在史游後一百餘年、即解散

隸體、明是史游創焉。史游即章草之祖也。

(懷瓘は思うに、……史游の草書を章〔草〕と呼ぶのは、ほかに張伯英(張

芝)の今草があるからそう呼ぶのである。それはちょうど篆書は周の宣王の

時の作であるが、秦篆ができてから区別して大〔篆〕と小〔篆〕の名ができ

たのと同じである。魏晉のとき、名流君子たちはおしなべて草書と呼んだが、

私の言うところを理解してくれる人ならばこのことをよくわきまえてくれる

だろう。章草は隸書の早書きであり、草書はまた章草の早書きである。

思うに、杜度は史游のち百余年に出て、隸体を解放したのであり、史游が章草を創めたことは明らかである。史游は章草の始祖である)

と言ひ、また、

歐陽詢與揚駙馬書草千文、批後云、張芝草聖、皇象八絕、竝是草草、西晉悉然。迨乎東晉、王逸少與從弟洽、變章草爲今草。韻媚宛轉、大行於世、章草幾將絕矣。

(歐陽詢は楊駙馬のために章草千字文を書き、後に書きこみをして言う、「張芝は草聖、皇象は八絶、これらはみな章草であり、西晋はみなそうであった。東晋になって、逸少(王羲之)が從弟の王洽とともに、章草を変えて今草をつくった。〔その書は〕韻媚宛轉(美しく変化し)、おおいに世に行われ、章草はほとんど絶えようとしている」と)

と、歐陽詢の語を引いて、張芝・皇象を章草の名手とし、今草に王羲之・王洽の名をあげている。また、章草の「神品」に張芝・皇象の他に、杜度・崔瑗・索靖・衛瓘・王羲之・王献之をあげている。

唐・韋統の『五十六種書』は、第四十一に「章草書」をあげ、章草書、漢齊相杜伯度接蘂所作。因章帝所好、名焉。韋誕謂之草聖。

(章草は、漢の齊相杜伯度が原稿用に作ったもので、章帝が好んだことからこの名がある。韋誕は草聖と呼ばれた)

と言う。

宋・『宣和書譜』草言叙論には、

篆隸之作古矣。至漢章帝時、乃變而爲草。駸駸至陵兩晋、王氏羲献父子、遂進於妙。漢如蔡邕、亦一時號爲子墨卿也。稽考古今法書、而獨以草書爲秦苦篆隸之難、不能投速、故作草書。是不知杜度倡之於漢、而張芝皇象、皆卓卓表見于時。崔瑗崔寔羅暉趙襲、各以草書得名、世號草草。至張伯英出、遂復脫落前習、以成今草。

(篆書や隸書の起源は古い。漢の章帝の時に至って、それらの書体が変化して草草が生れた。時は移り兩晋に至って、王羲之・王献之の父子が現れ、絶妙の筆致を見せることとなった。漢代にも蔡邕のように、子墨卿と呼ばれるほど書に心を寄せた人物もいた。古今の法帖を考えはかつて、秦のとき篆・

隸がむずかしく、速く書けないのに悩んで、作り出したのが草書であるとしている。これは、杜度が漢代に提唱し、張芝や皇象が(すばらしい草書をかいて) 当時に傑出したことを知らないものの意見である。崔瑗・崔寔・羅暉・趙襲はいずれも草書で名声を得、世に章草と呼ばれた。張伯英(張芝)が出現するに及んで、従来の書風から抜け出して、今草といわれる書体を完成したのである)

と、章草から今草への移行についても述べている。

以上のように、章草のことについて古く述べた文献として『漢書』、『説文解字』があげられるが、それは後の人がこれらに述べられている草書を章草と解しているもので、章草という名称は南朝・宋の時代に入り、初めて現れるのである。その後唐代になると、『書譜』、『書断』など多くの文献に見られるように、一般に定着していたことが窺える。

## 2 隸草・急就・行草

章草は、別に「隸草」・「急就」・「行草」とも呼ばれた。「隸草」については、清・阮元の『北碑南帖論』に

唐人修晋書・南北史傳、於名家書法、或曰善隸書、或曰善隸草、或曰善正書、善楷書、善行書、而皆以善隸書爲尊。

と見え、「急就」は、文字通り「急就草」によるもので、明・項穆の『書法雅言』に、

書法之目、止以篆・隸・古文・兼乎真・行・草體。……他若急就・飛白・亦當游心。

また、張懷瓘『書断』に

損隸之規矩、縱任奔逸、赴速急就、因草創之義、請之草書。

と見え、「行草」については、明・陶宗儀の『書史會要』に

史作急就草一篇、解散隸體、粗書之、損隸之規矩、存字之梗概。本草創之義、

謂之行章以別今草、謂之章草。

と見える。このように、章草の別称として隸草・急就・行章とも呼ばれていたことが窺える。

## 二 由来について

前掲の諸書には、その名とともに創始者・命名の由来についてもふれているものがある。創始者については、張懷瓘の『書斷』に、「章草は、漢の黃門令史游の作りし所也。」と言い、蕭子良の「章草は、漢齊相杜操始めて藁法を變ず」とするのを否定し、王愔の「漢元帝の時、史游急就章を作り、隸體を解散し、之を麤書す。漢俗簡惰、漸く以て之を行ふ。」と言うのを肯定している。また「明らかに史游これを創む。史游は即ち章草の祖なり」とも言っている。名称の由来については、『書斷』に、「蓋し章奏に因りて、後世これを章草と稱す」と、「章奏」の意からとしている。

また、唐・竇泉『述書賦』上、竇蒙注も、

章帝貴其迹、詔上章表、故号章草。

と言う。章續は「章帝の好む所に因りてこれを名づく」と、章帝が好んだことかからとしている。

清・劉熙載は『藝概』書概に、

章草章字、乃章奏之章、非指章帝、前人論之備矣。世誤以為章帝、由見閣帖有漢章帝書也。然章草雖非出於章帝、而閣帖所謂章帝書者、當由集章草而成。

(章草の章字は、章奏の章で、章帝を指すものでないことは、先人が論じつくしている。世に誤って章帝とするのは、『淳化閣帖』に漢章帝の書があるのを見るからである。しかし章草が章帝から出たのではないといっても『閣帖』のいう章帝の書は章草を集成したものである)

と、章帝の章であることを否定している。

現代の解釈としては、以上の諸説を踏まえて、我が国では藤原楚水『中国書道史』(三省堂・一九六〇年)に、

その起源は章帝史游より前にあったものと見てよいであろう。急就篇は漢のときに使用された字書の一つで、その編纂者が史游で、偶然その書體に章草を使用したというに過ぎないであろう。なおそれは李斯が当時秦の地方に行われた文字を整理して倉頡篇九章を作ったと同じく、史游は章草の整理をやったものかとも思われる。

と言い、松井如流氏は、『中国書道史随想』(二玄社・一九七七年)に、

隸書が簡略な筆となつて、草隸とよぶべきものも生まれている。さらに草隸がもつとくずれて章草といわれる体が出来た。

と言っている。また、中田勇次郎氏は、『中国書道全集』(第二卷・平凡社・一九六九年)に、

書體の変遷の歴史から言えば、篆、隸の標準體のほかに、草體の通行體が認められたことになり、その草書が隸書の特徴を示す波磔をもつた体に固定化してそれが章草という書體として認められるようになったのである。

と言っている。そして西川寧先生は、『書道講座』(第三卷草書・二玄社・一九七六年)に、『急就章』の草書の残紙を紹介し、

……急就章の關係から考えると、古く杜操・鐘繇・皇象・索靖・衛夫人・王羲之などのかいたものがあつたというが、北魏、北齊あたり、六朝後半期に入ってから注解を作つたり、諷誦したりした人の名が少なからず伝えられる。六朝後半、五―六世紀というものは殊にさかんに注意を集めたわけである。

すると北齊(五世紀)の頃、章草の名が定着するが、あたかもその頃、書物としての急就章が特に知識人の注目的となった。とすれば「章草」の名は急就章用の草書體という意味であらわれたものではないのか。章草の字義については、古くからいろいろの説があるのだが、私はこう考えるのが最も

事実についた、自然な解釈ではないのかと思う。

と述べ、急就章の草書という見解を示されている。

このように諸説有り、まだ確定することはできないが、『急就章』の存在の意識からすれば、西川説が妥当と考えられる。

また、史游の『急就章』は、本来は『急就篇』であったが、章草の名称の出現とほぼ同時期に、『急就章』と呼ばれるようになったとみられる。

なお、陳兆国氏も『必読書道史』（二玄社・一九九八年）に、

最初に章草を作った書家は、前漢の史游である。章草は隸草、急就草ともいわれる。隸書の早書きで、草書に破磔があり、同時に各字が連綿していないような書体を指す。史游は前漢の元帝のときの書家。生没年は不詳。黄門令をつとめ、章草の創始者といわれている。章草の名称は史游の書いた『急就篇』からきている。

と言い、急就章説に従っている。

### 三 伝存資料による認識

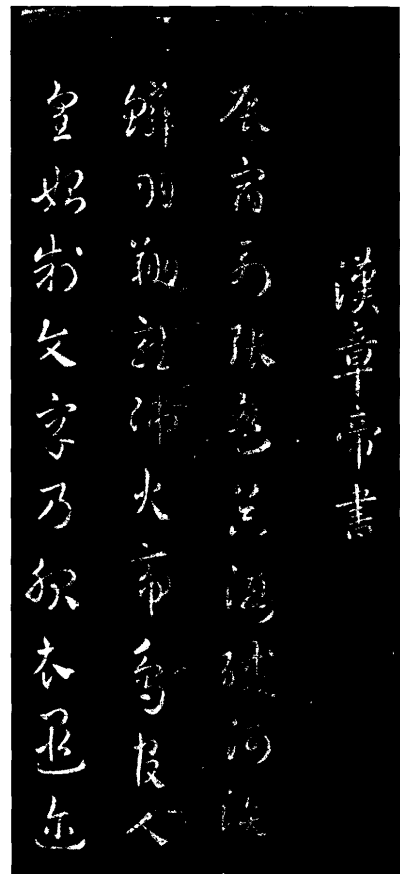
現在では、二十世紀に入って出土した簡牘等によって、その実相を明らかにされつつあるが、それまではいかなるものを見て章草を認識していたのか。ここで歴代の伝存資料をあげてみたい。いうまでもなく、その主たるものは「法帖」である。

(図一) 漢・章帝 『千字文』(『淳化閣帖』肅府本所収)

章草の名称の由来に関わる、章帝の書とされる。いわゆる南朝宋人の意識した章草の典型である。

字粒が揃い、パラパラとした感じがするが、字形固定化され、しかも、隸書からの簡略の仕方が統一されてきている。

このように法帖に刻された漢代の草書はほとんど章草体である。



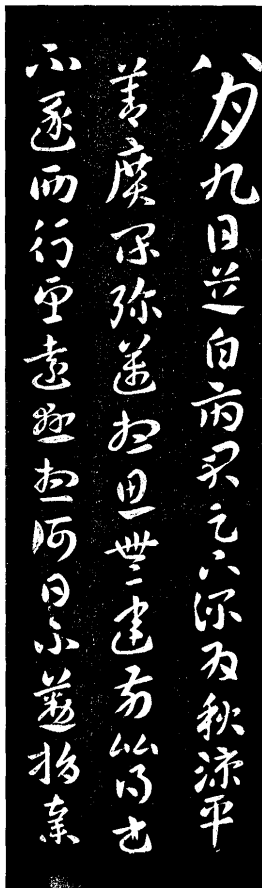
(図二) 漢・張芝 『秋涼平善帖』(『淳化閣帖』肅府本)

張芝は、初め崔瑗と、杜度を師と仰いで草書を学んだが、ついに師よりまさるとの称賛をほしいままにした。

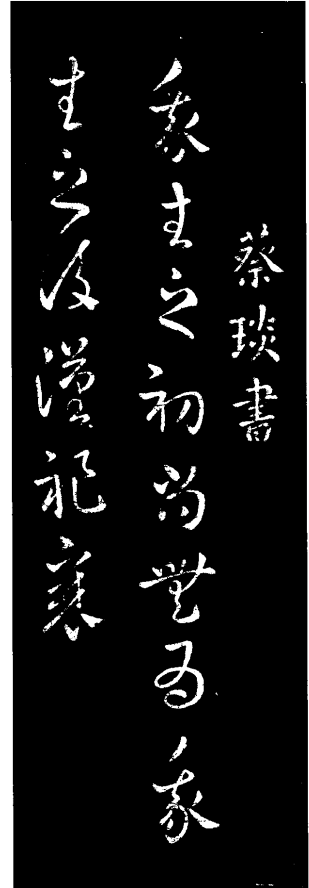
唐・李嗣真『書後品』に、

伯英章草、似春虹飲潤。落霞浮浦、又似沃霧沾濡、繁霜揺落。

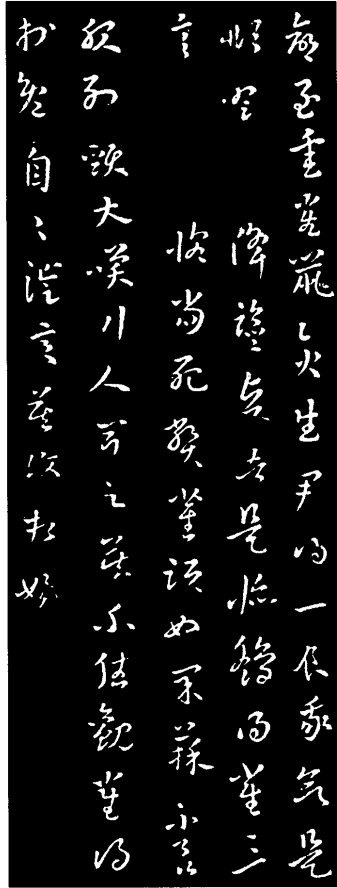
と評されている。線質には隸意を感じるが、かなり草書の字体となっている。また、行書の字体が見られる



(図三) 漢・蔡琰 『我生帖』(『淳化閣帖』 肅府本)  
 伝世の女流の最古の筆跡と伝えられる。



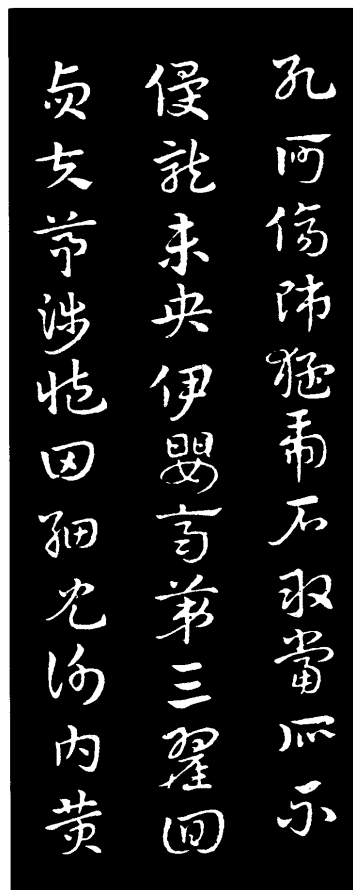
(図四) 魏・曹植 『鶴雀賦』(『偽絳帖』)  
 書体はほぼ草書で、連綿はしていない。全体的に右上がりであるが、隷書の筆意は残っている。



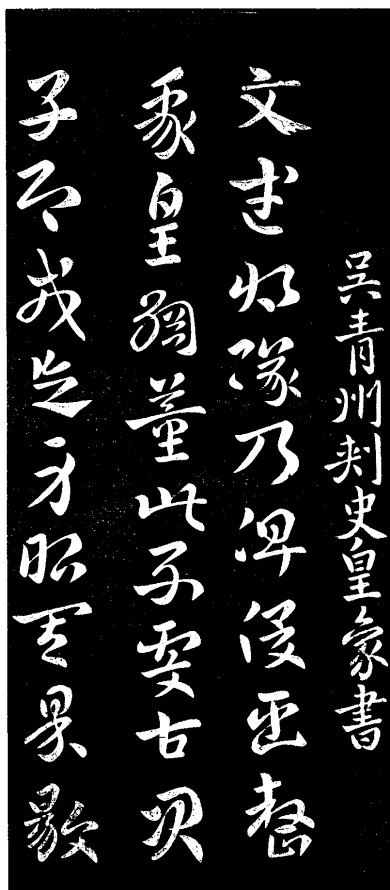
(図五) 吳・皇象 『急就章』(『淳化閣帖』 玉煙堂帖)  
 この書はしばしば傳模を経たために、字形筆法にそれぞれの時代の人々の風気が加わり、原型とはかなり異なるものになっていると思われるが、後世、章草の典型として重んじられてきた。

横画に波磔が残りながらも、連続した点画が多く、正に急就章、即ちお手本である。

皇象は、初め杜度に学んで章草をよくした。縦横自在、思いのままの運筆の妙を備えていると言われ、当時、章草は神品であると見なされた。



(図六) 吳・皇象 『文武将隊帖』(『淳化閣帖』 肅府本)  
 『頑闇帖』(図七)と比較して古意を有している。



(図七) 吳・皇象 『頑闇帖』(『淳化閣帖』 肅府本)  
 線に抑揚があり、明らかな草書の字形の文字もあるが、やはり右回転と右払いに章草の特徴が見られる。章帝の『千字文』に類を同じくする。

正象之福... 凡る... 殊受之通...

(図八) 晋・宣帝 『阿史帖』(『淳化閣帖』 肅府本)

「列」「曹」字に草草の特徴が見られる。

西晋宣帝書  
 之... 亦...

(図九) 晋・陸雲 『春節帖』(『淳化閣帖』 肅府本)

波磔はあるが、草書・行書の風趣を持つ。章帝の「千字文」に類を同じくする。

晋陸雲書  
 三月十六日...

(図十) 晋・衛瓘 『頓州帖』(『淳化閣帖』 肅府本)

波磔はほとんど見られないが、連綿はしてない。各字独立して完結しようとしているところが古くから草草作品とされる所以であろう。

晋尚書令衛瓘書  
 長物... 取... 不...

(図十一) 晋・索靖 『月儀帖』(『鬱岡齋帖』)

索靖は、幼少のころから拔群の才能で、好んで書を書き、ついに草草の名手として天下に知られ、学書者はみな彼を規範と仰ぐに至った人物であったという。自由に筆が動き、のびのびと書かれている。

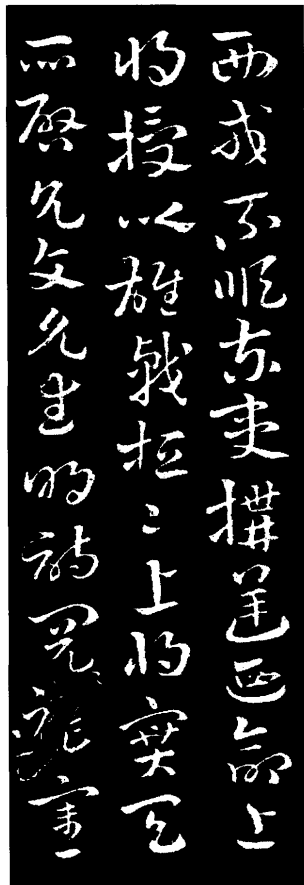
索靖曰...

(図十二) 晋・索靖 『出師頌』(『宋拓晋唐楷帖』所収)

古雅の意に富む佳蹟とされる。全体に右上がり、線で抑揚があるが、八分の筆勢も残している。今草に見られる筆順で書かれている文字も認められる。

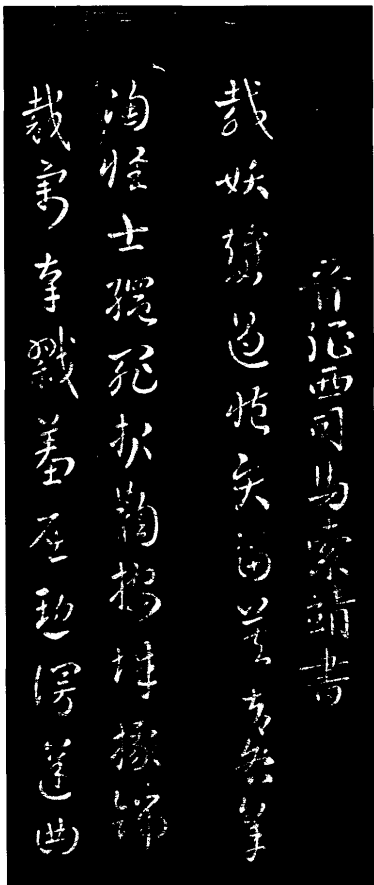
趙正は『漢簡書法論集』に、

波勢精妙、結構自然、布局井然、筆法簡樸、古雅精美、是書法寶庫中的明珠と評している。



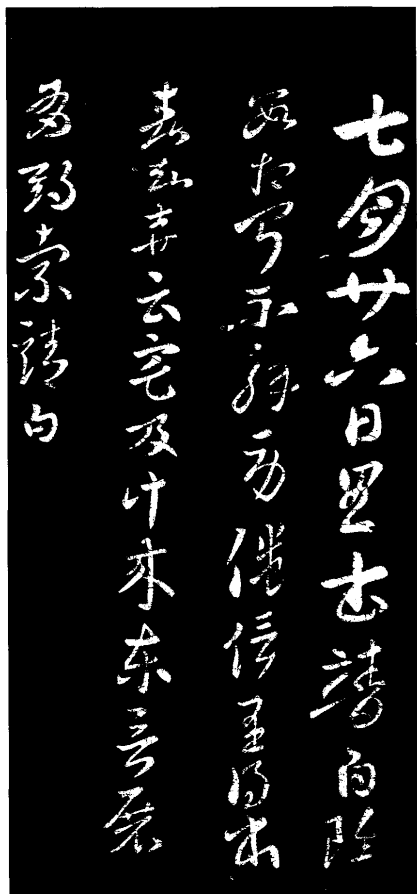
(図十三) 晋・索靖 『載妖帖』(『淳化閣帖』肅府本)

終筆に筆を止めて完結し、字間をとって次に続く姿勢をあまり強く示していない。また右回転を強調した運筆も見られる。



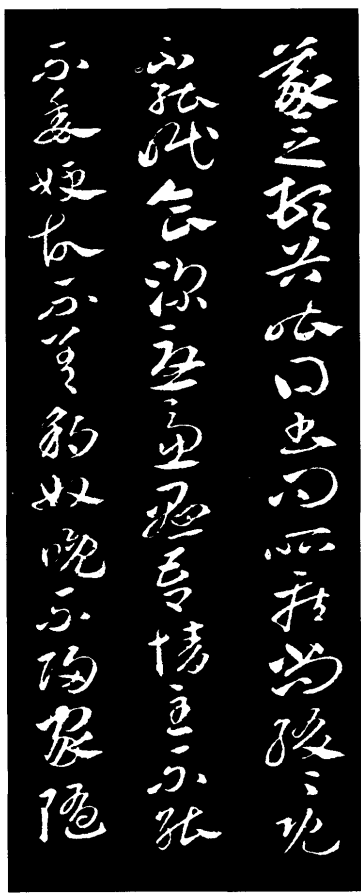
(図十四) 晋・索靖 『七月廿六日帖』(『淳化閣帖』肅府本)

索靖の他の帖に比して、字の大小の差が大きく、次の字に続くような形をとるものが多い。隸意は残っているが、今草に近い章草である。



(図十五) 東晋・王羲之 『豹奴帖』(『澄清堂帖』)

王羲之は章草もよくしたといわれているが、今に伝わる章草の筆跡はこの帖のみである。字体は扁平で古意がある。なお王羲之が専ら章草で書いたものはこの一帖であるが、王羲之の他の帖、『三月廿四日帖』をはじめ、『十七帖』中の諸帖にも、章草の筆意の見られるものが少なくない。



なお王羲之には、「皇草草草、皆信送之。勿三、當付良信」と書いた『皇象帖』



が『淳化閣帖』に残されている。王羲之の時代には、章草を「草草」とも呼んでいたと見られる。

ここで、『宣和書譜』に云うところの、章草の生まれた章帝時代の章草と比較してみよう。

『章帝千字文』等に見るような漢代の書きぶりや筆づかいは、隷書の筆法を意識することなく、書けば隷書になっているという時代の人々の書である。すなわち楷書・行書・草書を知らない時代で、どのように書いても隷書のリズム、波勢のある文字となるのであった。

それに対し、王羲之は東晋の人で、草・行・楷書が一般化されつつあった時代である。この隷書に対する意識の差は大きなものであると考えられよう。

全体に見て、『章帝千字文』は、連綿せず独立しており、それぞれの字間の取り方は漢碑や漢簡の隷書と酷似している。それに対し、『豹奴帖』は、字と字が接近しており、『書斷』に云う「章草之書、字字區別」は守っているものの、行に流れを感じさせる。

また『章帝千字文』・『豹奴帖』に共通する文字として「彼」と「既」の二例があり、この両字を比較してみよう。

【章帝千字文・彼】



【豹奴帖・彼】



右払いの太く力強い波磔が共通している。時代を経ている、章草の特徴としてとらえられていた部分であろう。隷書に近い払いでなければならぬと認識されていたことを示していると見られる。

【章帝千字文・既】



【豹奴帖・既】



終筆の右上への跳ね上げる形が、次の字への連続でなく、その一字をまとめあげる意識で書かれている。この終筆の特徴は随所に見られる。ただ典型的な隷書よりも、草書化している筆意に随ってのものとなっている。

おわりに

章草の名義に関する考察を試みるために、これまで論じられてきた諸説をたどり、その根拠となる法帖の章草をあげてみた。それによって十分とはいえないが、いささか窺い知ることができた。

今後も章草について考察を深めていく所存であるが、次段階としてさらに新出土の資料も含めて、秦・漢・三国時代のいわゆる草書の簡牘・帛書・残紙を取り上げ、研究を進めていきたい。